

令和6年度 第41回全国高等学校体操競技選抜大会

【男子体操競技審判員報告】

審判長 佐々木 彰文

1. 採点上打ち合わせた事項

- ① 適応規則の確認
2025年版採点規則
2025年版高等学校男子適用規則
- ②採点の指針について
- ③新技申請
なし
- ④監督会議連絡事項
適応規則の確認
Dスコアに対する質問について

2. 採点上おこった事項とその処理

鉄棒において伸身トカチェフの実施でバーを超える際の腰の角度が45度を越えていたためD1審判員はC難度として判断した。その結果、インクワイアリー（問い合わせ）となり映像を確認した結果、D1と同じ見解だったため得点の変更はなかった。

3. その他 特記事項

大きなルール変更となった男子体操競技は、今大会においては2025年版高等学校男子適用規則を採用する大会となった。その背景にはゆかの最終コースにおいて2回宙返りを施さなければならないルールとなったことから、無理をして技をとり入れることによる怪我防止の観点から1番の理由であり、安全に配慮し大会を行う上でも演技中に2回宙返りが含まれていればよいという適用規則を採用とした。また、各種目の競技前ワンタッチアップについては全種目50秒となったが大会運営に支障をきたす関係からゆか、あん馬、つり輪、鉄棒は30秒、平行棒は50秒、跳馬は1人2本アップとした。また、ルール変更により平行棒における計時審が除外となったが計測を行わないわけではないのでE4が兼任とした。着地に対する加点も新たに追加され、その表記については国際的にもDスコアに含まないという方向性となり今大会においては審判の机上に0.1の表記を掲示した。速報においては今後国内でもBonusという表記で掲載する。

審判会議においては、Dスコアの数値に関わらず素晴らしい演技や減点ができない実施に対して素晴らしかったといったEスコアでの評価をしてほしい、また時に選手が意図する技の認定とはならなかった場合、また厳しい評価であったとしてもそれは将来に向けて選手を強くすることでもあり、そして日本を強くすることにも繋がるといったことも今大会に参加した審判とともに共有する内容の審判会議を行った。

競技全体を通してDスコアはさほど高くはないが、各種目において非常に丁寧な技捌きや、着地に対する意識や強化が進んできていると思われる実施が多く散見された。しかしルール改正後や春先最初の大会である関係から各種目において大過失も散見された大会であった。

これからを担う選手たちにとってロサンゼルスオリンピックやブリスベンオリンピックといった今後のオリンピックも視野にいれ、更なる強化となるようそしてより美しく力強い日本を築いていけるよう期待し、今大会の報告とする。

1. 採点上の打ち合わせ事項

○2025年版採点規則、2025年版高校適用規則の確認

- ・種目特有の評価ポイントの確認
 - ① 雄大なアクロバットの跳躍技の先取りのある安定した着地
 - ② 宙返りひねり技でのゆがみのない正確な実施
 - ③ グループⅠの旋回技や力静止技、柔軟技や片足平均立ちにおいて丁寧に美しさを表現する捌き
- ・技の認定、実施に際してはルールに則り厳密に採点する。
- ・組み合わせ加点、ニュートラルディダクションの確認。

2. 採点上起こった事項とその処理（58演技中：棄権および0点実施を除く）

■技の認定について

- ・静止が求められている技において、静止が見られない実施は不認定とした。
- ・開脚座から伸腕屈身力十字倒立において、上昇中に脚が45°を超えて下がった実施は十字倒立の静止のみ認定した。
- ・開脚座から伸腕屈身力十字倒立において、立位の姿勢が見られた実施は十字倒立の静止のみ認定した。

■NDについて

- ・タイム減点：0.1=1件 ・ライン減点：0.1=12件/0.3=5件
- ・同じ対角線の連続使用0.3=1件 ・2回宙返り技を実施しない(高校適用)0.3=3件
- ・片足平均立ち技の未実施（不認定含む）0.3=1件

■組み合わせ加点について

- ・実施件数 0.1加点：35件 0.1加点+0.1加点：3件
- ・実施内容 2回宙返りとの組み合わせ：4件

■着地加点について

- ・5件（内訳：後方伸身宙返り2回ひねり=4、後方屈身2回宙返り=1）

■2回宙返りでの終末技の実施について

- ・実施37件（内訳：C難度=9、D難度=26、E難度=2）

3. その他特記事項・意見・感想等

58演技中Dスコアの平均は4.43であり、そのうち5.0以上のDスコアは6演技であった。Dスコアの最高は5.2点で1演技、組み合わせ加点を伴う構成の実施は38演技（昨年度33技）、そのうち2回宙返りを含む実施が4演技（昨年度1演技）であった。グループⅡおよびⅢにおいてそれぞれD難度以上を実施したのは37演技（昨年度D難度以上の2回宙返りを2種類実施したのは3演技）であった。

Eスコアで8.50以上の得点であった演技は6演技（昨年度4演技）であり、いずれも技の正確性や着地準備を含め安定した着地姿勢が見られた。一方、着地における転倒が14件（11名）に見られた。NDの数からも伺えるが、シーズン初めの競技会ということもあり充分な調整に至らなかった選手も多く見られた。宙返りや着地での足の開き・空中姿勢・ひねり不足・着地準備・着地と1つの宙返り技で複数の減点項目に該当する選手が多く見られるなど、演技実施において未完成であると感じられる実施が見られた。

ゆかの本質となる雄大な宙返り技での先取りのある安定した着地、宙返りひねり技での正確な実施、グループⅠでの丁寧に美しさを表現する捌きなど、技術の向上と雄大かつ美しい実施を意識した練習に励んでいただき、成果が発揮できることを期待する。

1. 採点上の打ち合わせ事項

- ・2025年版採点規則および高等学校男子適用規則の確認（技の認定と減点項目について）
- ・腰の位置が高く、雄大かつスピード感のある旋回を評価する。
- ・倒立を経過する技では、停滞や力の使用がなくスムーズに倒立に持ち込む捌きを評価する。
- ・演技全体を通して、習熟度の高い安定感のある実施を評価する。

2. 採点上起こった事項とその処理

■技の認定について

- ・交差倒立技は3例実施され、腰がまがった実施もあったが、許容範囲内であったため認定した。
- ・交差横移動技において、脚部が極端に馬体に乗る実施は不認定とした。
- ・グループⅡ/Ⅲの技において、次の技に続けずに落下したものは不認定とした。（少なくとも半周旋回および1/2転向後の明確な支持がみられれば認定される。）
- ・倒立下りにおいて、振り上げた脚が極端に下がった実施は不認定とした。
- ・倒立3部分移動270°ひねり下りにおいて、バランスを崩して途中で下りた実施はC難度を認定した。

■Eスコアについて

- ・縦向き3部分移動技において、角度逸脱がみられたものは技全体で1番大きな減点のみ適応とした。（2025年版採点規則からの新しい規則）
- ・片脚振動における足先の高さが肩よりも低い実施については、その都度減点をした。

3. その他特記事項・意見・感想等

2025年版採点規則が適用される初めての全国大会となったが、あん馬においては大きな変化はなく、旋回技の質や、交差技の出来栄が評価の対象となった。旋回技において、腰が折れる実施や、身体の伸ばしが見られない実施では高い評価とはならなかった。一方で、腰の位置が高く、雄大かつスピード感のある旋回で実施された演技は高い評価となった。また、片脚振動において、意識的に脚を高く振り上げる捌きや、交差技の後半に足先を高い位置に残す捌きが、演技のメリハリを引き立てていた。2部分の後ろ移動（いわゆるBバック）や、3部分の後ろ移動において、抜き正面支持の手をしっかりと引き、正確な縦向き正面支持になっている捌きも演技として魅力を感じた。しかしながら、向きを意識するあまり、腰が折れた旋回となってしまっている選手も見受けられた。

実施された57演技中、落下者は20名で、落下数は32回であった。ルールの変わり目で演技構成の変更を伴う種目も多かったことから、演技の習熟にかかる時間が充分にとれていなかったことが伺える。

Dスコアの平均値は3.8、Eスコアの平均値は7.21であった。10技から8技の演技構成へと変更になったが、以前から多くの選手が8～9技で演技を構成していたため、Dスコアの平均値が大きく下がることはなかった。Eスコアについては、落下の数が多かったことも影響し低く留まっている。

大会全体を通して、落下の見られる演技や大きく乱れる演技は多かったものの、体をまっすぐ伸ばした姿勢でスピード感のある旋回を実施する選手も増えてきているように感じる。今後はそれらに加えて、技の正確性と安定感を高めること、そしてDスコアを上げていくことも課題として日々のトレーニングに励んでいただきたい。

1. 採点上の打ち合わせ事項

- ・2025年版採点規則および2025年版高等学校男子適用規則の確認。
- ・力静止技における減点の確認（持ち込み時の角度逸脱、最終静止姿勢、静止時間、肘のまがり等）
- ・倒立位で腕がケーブルに触れる、肘や腰を使って調整などの減点の確認。
- ・着地加点の対象となる実施の確認。
- ・各々の演技は、理想とする完璧な演技を基準に評価される。

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・力静止技や倒立技において、静止がみられないものは不認定とした。
- ・振動倒立技（2秒静止）において倒立に持ち込む際に肘が大きくまがった実施は難度を認定し、肘まがりの減点对対応した（高校適用規則）。ただし、一度倒立に収まった後に肘や腰が大きくまがった実施は不認定とした。
- ・「後方伸身2回宙返り下り（C）」において、腰のまがった姿勢で実施したものは「後方屈身2回宙返り下り（B）」と判定した。
- ・終末技における着地加点について、着地をした際にかかとが上がった実施は加点を与えなかった。

■終末技（E G IV）の実施件数と着地加点の件数の分布

技名	難度	実施件数	着地加点件数
後方伸身2回宙返り2回ひねり下り	F	2	1
後方かかえ込み2回宙返り2回ひねり下り	E	22	4
後方伸身2回宙返り1回ひねり下り	D	5	
前方屈身2回宙返り下り	D	2	
後方伸身2回宙返り下り	C	4	2
後方かかえ込み2回宙返り1回ひねり下り	C	17	6
後方屈身（かかえ込み）2回宙返り下り	B	5	
後方伸身宙返り下り	A	2	
後方かかえ込み宙返り下り【高校適用】	A		
		59	13

3. その他特記事項・意見・感想等

今大会は新しい規則での国内最初の大会であり、カウントする技数が10技から8技に減ったことによる影響か、大きな失敗のある演技は例年に比べ少なく感じた。また、新しい規則が正しく理解されており、構成上の欠陥はEGⅡ・Ⅲの4連続が1件あっただけで、それ以外は問題なかった。演技実施においては、多くの選手がヤマワキ系の技から後ろ振り上がり倒立（2秒）を実施し、ヤマワキ系の技の難度格上げを狙ってきたが、実施面では肘をまげて倒立に持ち込む実施が多く見られ、大きな減点を被った。また、高校適用規則ではE難度のEGⅡ・Ⅲの技を実施した場合0.1の加点対象となるが、今大会において該当の技を実施した選手はいなかった。多かった高難度の力静止技は中水平支持（D）やホンマ十字懸垂（D）、アザリアン（D）等であった。新しい規則では着地加点の規則が設けられ、そのため全体的に着地への意識が高まり、多くの選手が着地を止めにくい安定した終末技を実施していた。

選手の皆さんには、今後も日々のトレーニングを継続的にこなっていただき、この規則が適用される4年間でさらにDスコアとEスコアともにスコアアップを目指していただきたい。日本の弱点と言われているつり輪を強化するためには高校生といった若い時期から高難度技の習得が必須であると考える。

1. 採点上打ち合わせた事項

- ・2025年版採点規則および2025年版高等学校男子適用規則の確認
- ＊第一空中局面、支持局面、第二空中局面、着地での局面ごとの減点の確認
- ＊美しさ・雄大性を表現した演技実施
- ＊ひねり不足や空中姿勢の腰まがりや膝まがりの実施について
- ＊着地前の先取りが行われているかどうか
- ＊意識的に着地を止めた実施かどうかの見極め
- ＊腰高な着地や腰の位置が低い着地の評価について

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・雄大で高さのある跳越技を評価した。
- ・ひねり不足や着地準備等は厳密に採点した。

3. その他特記事項・意見・感想等

昨年度は、ロペスを実施した選手が1名、ドリッグスを実施した選手が10名であったのに対し、本年度はロペスを実施した選手が4名、ドリッグスを実施した選手が16名、そしてローチェを実施した選手が1名とより高度な跳躍に挑む選手が増加し、全体的な技術レベルの向上が見られた。

一方で、第一空中局面での足の開き、着地姿勢の乱れ、着地時の不安定さなどによる減点が目立ち、高難度の跳躍を実施した選手においてもEスコアで9点を超える実施は少なかった。そのような状況の中、上位入賞を果たした選手は、第一空中局面での足が閉じており、腰の高い位置での着地ができていた。

着地を止めて加点を得た選手は8名であった。また、ラインオーバーによる減点も散見され、多くの選手が得点を伸ばす上での課題になったと感じられた。

高校生の選手たちが積極的に高難度の跳躍技に挑戦する姿勢は高く評価できる。しかしながら、第一空中局面での足の開き、着地姿勢の安定性、そしてラインオーバーなど、更なる得点向上のために必要なことも見えてきた。次回の大会に向けて、雄大かつ美しい跳躍、そして安定した着地を意識した練習に取り組んでほしいと期待する。

■実施された技の分布 (59名)

グループ	跳越技名	価値点	人数	加点	ND0.1	ND0.3
I	ロペス	5.2	4人	1人	1人	1人
	ドリッグス	4.8	16人	2人	6人	1人
	アカピアン	4.4	16人	2人	4人	3人
	ロウ・ユン	4.4	1人			
	伸身カサマツひねり	4.0	2人	1人	2人	
	伸身カサマツ	3.6	11人	1人		
II	前転とび	1.2	1人			
	ローチェ	4.8	1人			
III	かかえ込みツカハラ	1.8	1人			
	伸身ツカハラ	2.8	1人			
IV	伸身ユルチェンコ2回ひねり	4.4	2人	1人		1人
	伸身ユルチェンコ1回ひねり	4.0	1人		1人	
	0点実施		2人			

1. 採点上打ち合わせた事項

採点規則・競技規則について

- ・2025年版採点規則の確認
- ・ウォーミングアップは各選手に対し50秒が与えられ、口頭によりコールをして伝える。

Dスコアについて

- ・静止技において静止がみられない実施は不認定とする。
- ・振動倒立技において、肘を伸ばして明確に倒立姿勢を示さない実施は不認定とする。
- ・後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持やヒーリーの支持局面で90°以上肘がまがる実施は不認定とする。

Eスコアについて

- ・正確な倒立位を示し、雄大な終末技を実施した演技を評価する。
- ・後ろ振り倒立から支持・腕支持・懸垂に振り下ろした場合0.3の減点。
- ・振動から倒立になる技の角度減点について確認。
- ・終末技において、低い姿勢での着地は厳密に減点する。
- ・手ずらしは毎回0.1の減点。

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・「ティップルト」において、脚部がバー上にのったものは器械上の落下とし、不認定とした。
- ・「前方宙返り開脚抜き腕支持」において、脚がバーの上にのったものは器械上の落下とし、不認定とした。
- ・「ディアミドフ」「前振りひねり倒立」において、明確に倒立位を示さなかった実施を不認定とした。
- ・「脚前挙」において、静止が見られなかった実施に対して不認定とした。

3. その他特記事項・意見・感想等

7技+終末技の8技を認定するルールに変更されてから初めての国内全国大会でありDスコアの最高は5.2であった。Dスコアの分布は以下の通り。

- 5.0～5.2：2演技
- 4.5～4.9：7演技
- 4.0～4.4：12演技
- 3.5～3.9：19演技
- 3.0～3.4：9演技
- 2.5～3.0：2演技
- 2.0～2.4：6演技
- 1.5～1.9：1演技

不完全な実施で不認定となった技は、22技あった（ティップルト7、棒下宙返り倒立4、ディアミドフ2、前振りひねり倒立4、後方車輪1、モイ2、前方宙返り開脚抜き腕支持1、脚前挙1）。演技途中の落下（器械上の落下含め）や終末技も含み、全体的に不安定な演技が多かった。

後ろ振り倒立からの振り下ろしに対して0.3の減点となるルールが追加されたため、多くの選手が複数回、倒立ひねりを実施していたが、手ずらし・倒立位からの逸脱による減点が多かったため今後の修正に期待したい。また、ルール変更に伴い難度が上がった、2回宙返りから腕支持になる技（モリスエ等）や、後ろ振りとはび倒立系の技の実施は0件であった。

1. 採点上の打ち合わせ事項

- ・2025年版採点規則および2025年版高等学校男子適用規則の確認。
- ・雄大な手放し技や正確な終末技を評価する。
- ・倒立位を経過する技、ひねりを伴う振動技での角度減点の少ない実施を評価する。
- ・その他映像を用いて確認した事項
 - * 伸身トカチェフ、ヤマワキの認定基準について
 - * 逆手背面車輪の認定は、下降局面からバーを越えるまでの全経過で肩が未転位
 - * 演技開始の振り出しにおいて3回を超えたスイング
 - * 余分な手の握り換え
 - * 車輪でバーの下を通過する際の膝まがり
 - * 倒立になる、または経過する技の角度逸脱について範囲の確認
 - * 手放し技でバーを握る際の腕のまがり、身体の歪み

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・伸身トカチェフでバーを越える前に45°を超える腰のまがりがあった場合は、屈身トカチェフ(C難度)と判定した。
- ・手放し技において、バーを握る前に身体の伸ばしが不十分な捌きや、バーを握る際に腕のまがった実施、身体が歪んだまま懸垂になるものは実施減点とした。
- ・ヤマワキは、上昇の仕方、腰のまがり具合、ひねりの度合いを総合的に判断した。明らかな腰のまがりが見られた場合や、表現が著しく乏しい実施はボローニン(B難度)と判定した。
- ・アドラー開始時に余分な支持回転のある実施は不認定とした。
- ・アドラー(1回)ひねりにおいて、終末局面が水平位よりも明らかに下がった場合は不認定とした。

3. その他特記事項・意見・感想等

2025年版採点規則が運用され間もない時期の競技会であり、演技構成面での対応が心配されたが、全体として大きな問題もなく演技が進められた。

難度変更により前ルールから格上げとなった屈身イエーガーは1名、ギンガーが6名の実施であった。また、組み合わせ加点については実施が無かった。終末技については26名が後方伸身2回宙返り2回ひねり下りで、全59演技中の過半数近い実施であり、終末技の高難度化への取り組みが伺われた。

Eスコアについては、最高が8.85で、アドラー系のひねり技での角度以外は良好な実施であり、着地も加点が得られる実施であった。しかしながら競技会全体としては、手放し技においてバーを握る際の肘のまがりや、単純な手ずらし、バーの真下での膝のまがりなどが減点の対象となる演技が散見された。また倒立位を経過する技やひねりを伴う振動技での角度等だけでなく、シュタルダーやアドラー開始時において、膝の緩みやつま先のまがりが目立つ選手が多い印象を受けた。更に、準備期間の少なさが影響してか落下を伴う実施も多く全体のEスコア平均は7.542と決して高い得点とは言えなかった。

自身が得意な部分を伸ばしつつ、改善が必要な部分から目を背けることなく、日々のトレーニングを積み重ね、素晴らしい競技生活となることを祈念し本大会の報告とする。